天才少女の授業態度

やー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天才少女の授業態度

【Ｎコード】
Ｎ１８０２Ｏ

【作者名】
やー

【あらすじ】
好きにしろ（仮）シリーズ短編第一弾。
超人的な記憶力を持った少女の授業態度です。

（前書き）

氷結瑞穂。今回の主人公。
容姿は腰まで届くほど長い、艶やかな緑の黒髪。
前髪の中央が左右に撥ねており、猫耳的な感じになっている。
身長は１３４ｃｍ。低身長な事は気にしてないが、もう少し欲しいとは思っている。
後は作中で把握してください。

鐘の音を模したチャイムが鳴ったと同時に教師が教室内に入る。つまり、授業開始。私は何時も通りに席を立ち、腰を曲げて挨拶をする。

「よろしくお願いします」

私は周囲と同じ台詞を、元々録音してあったテープレコーダーの様に発音する。

此処はタムコガネ第二高等魔法学校２年Ｂ組の教室内。そこの最も外側の窓側の一番後ろ側。そこが私こと氷結瑞穂の席だ――と私は改めて自分の周囲の再確認をおこなう。理由は一つ。暇なのだ。何故暇なのか？　教師――一応女性だ――の言葉を聞く為、意識を耳に集中する。ふうむ、氷属性魔法の教科書四十五ページの内容を丸々読み上げているのが聞える。黒板にも同じ様な事だ――とどのつまり、常人からすれば機械的に異常な私の記憶力を持ってすれば本など一度目を通すだけで覚えられる――つまらない。となれば何をするか？　そう、適当に思考を繰返すのみだ。如何せ私の記憶力なら気にもしていない講義など自然と耳に入ってくれれば記憶するし、そもそも魔法などと言う事象自体意味不明だ。何故念じただけで氷が生み出されるのか――と、私は一度その思考を主回路から切り離し、六個目の回路――魔法の議論に放り込む。こんなことは何時も考えているのでキリが無いのだ。取り合えず暇を潰すような事柄は無いものか――と、私は各思考回路を覗く――無論、六番回路は覗かない――十番回路――相変わらず忙しなく計算問題を続けている。自分で問題を作り、それを一々解いて行く。丁度暇だった私は混ざってみる事にした――１＋１＝２－１００＝－９８＋９８＝０＋１＝１×５＝５－７＝－２＋１＝－１×－１０００＝－１０００÷１０＝－１００＋５０＝－５０――おっと、入れ込み過ぎて時間の流れを忘れてしまうのも問題だ。名残惜しいものの私は十番目の思考

回路から九番目に移る――九番回路――動いてない。思考を続けてない様だ。さて以前に思考内容を記憶のデータベースから覗く。どうやら夕食について考えてたらしい。そう言えば今日のお昼はどうなっているのだろう？　昨日のお昼のお弁当を思い出す……ふむ、ウインナーに卵焼き、レタスにもやしの油炒め、胡麻塩ご飯か……今朝の匂いを思い出す。温かい味噌汁の香りと炊き立てのご飯の匂い。焼けた魚の香ばしい匂いにああ、沢庵もあった。ご飯と一緒に沢庵をぼりぼり食べたな。結構美味しい、たまには食べたくなる組み合わせだご飯と沢庵。焼き魚は、鮭。醤油とおろしのコンボがこれまた美味しい。何故に卸した大根と醤油、そこに焼き魚とご飯との組み合わせは何故にこんなにも会うのだろう？　あの大根の風味に、醤油と魚肉が混ざって生み出すあの味わい、そこのご飯を組み合わせる。ふむ、美味い。豆腐の味噌汁とご飯でも良い。いやいや、他にも味噌汁に相応しい具がある筈。そう、油揚げとか――いや待て待て、確かにそれは有意義と言うかもう直ぐ腹が減るというか、いや確かに次はもうお昼休み、空腹は感じるし確かに――思考回路をカット。九番思考はこれ以上いると空腹で授業所ではない。取り合えず放置が決定した。付き合っていてはこっちの腹が減る。

っとと、それよりもする事があった、流れた時間の影響を確認しなと……三秒経過か、後授業終了まで四十九分二十八秒……早く終わらせる方法でも考えよう。昼寝……教員に怒られるから却下。地味にこうしてなければいけない。うーむ……思考を停止して雲の様子を眺める……駄目だ、急に全思考回路は停止できない。カットするか……むむ、思考が絡まって来た。これは拙い、思考回路を整えるか……一番回路二番回路切り離し三番回路チェック四番五番六番回路オフ、七番八番回路チェック三番回路チェック完了所定の位置に戻して再起動……二三九四七九五六二九

四八七二六FSRYRGJSDHKHLJKTYJKNJGHKL
HJGHJGYTABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUX
YZ6473240384629833205398775610
010101100101101010101010101000
000000100101111111100000000000
000000000000000000000001111111
111111111111111111111111111111
110000000000101001111111111111
101000000000001011111111110000
000000010101010100001111011010
10010101010010110100……あいうえおかきく
けこさしすせそたちつてとなにぬねのはひふへほまみむめもやゆよ
らりるれろわをん1234567890…………………………
……………………………………………………各思考回路再起動

開始。各思考回路チェック……一番回路問題なし二番回路問題なし三番回路問題なし四番回路問題なし五番回路問題なし六番回路問題なし七番回路問題なし八番回路問題なし九番回路問題なし十番回路問題なし……全思考回路チェックOK、各思考回路を以前と同じように稼働…………さて、思考も整った。経過時間の確認、十分……ふぅ、長い。何を考えよう……と私は雲を見る。雲の流れをぼーっと眺めながら、徐々に思考の海へと落ちて行く——十番回路と九番回路の思考は今も活発に動いている。はまると危ないので八番回路に——ゲーム攻略についての思考だ。そう言えば火憐のお勧めで幾つか買って、一度クリアしてやり込みプレイを始めてる。そう言えばアクションロールプレイングゲームの主人公一人プレイをしていた。意外と面白い、苦行の中で何かを満たすのは素晴らしい事だ。私は帰宅後の楽しみにとして此処は放置しよう——と、私は八番回路を抜け出す。中々に興味深い回路ではあるものの、今はまってても無粋だ。次に七番回路に——七番回路は思考を停止していた。そこで何を考えていたのか、思い出す——最後に履歴によれば、此処で

思考していたのはお小遣いの使い道、だそうだ。ふむ、どうやら子供なりに家計簿の計算をしていたようだ――と、私はそこまで思い出して財布の中身を確認する――最後に使ったのは確か今やり込んでるゲームを買った時。その時の所持金は一万五十四ｅｎ、で五千二十ｅｎに落ちた。今買いたい物は――ふむ、来月に発売予定のゲームが楽しそうだ。確か予約もした。今身近で欲しい物は――シャープペンシル、ＯＫ。シャープペンシルの芯、問題なし。消しゴム、問題無い。各種文房具類、足りてる。ノート、ＯＫ。えーと……他に必要な物……無いな――無い。やはりゲーム位だ。ふむ、お小遣い日後に発売なのが救い、といった所――うーむ、どうやら此処では所持金の計算をしていたようだ。ならする事は特にない――と、私は七番回路を後にする。次に行くのは六番回路――魔力とは、魔法力とは一体何なのだろう？　そもそも人の意志が物理現象に影響するなどそもそもおかしい話だ。人の意志だけで如何こう出来るのであれば筋力トレーニングや体力トレーニングをしているスポーツマン達は一体何なのだろう？　そもそも人の意志と物理現象は切り離されている。魔法力が体力を消費し、生み出された魔力が脳内のイメージによって練り上げられ物質化するなどそもそもあり得ない。人の意志が一体どの様になれば物理現象に昇華すると言うのだろうか？　そこからまずあり得ないのだ、物理現象は物理現象、精神は精神。確かに私の手に念じれば氷が出て来る。そもそもその氷とは一体何なのだ？　氷とはＨ２Ｏが零度に達し、固体化したものだ。ならばこの氷はＨ２Ｏ、すなわち一般的に言われる水なのか？　いやしかし何の水だ？　空気中の水か？　ならば空気中の水分が多ければ氷魔法が作れるのか？　しかし氷魔法が最もその効果を発揮する場所は雪が降る様な場所だ。何でも氷の生成と維持に使う魔力が減るとか。それがあり得ない。何故だ？　何故水分も少ない場所での氷の生成に使う魔力が減るんだ？　そこから既におかしい。一体何を凍らせていると言うんだ？　そもそも魔法力自体あり得ない。体力を魔力に変換？　それこそお笑いだ。体力とは人間の持つ化学

エネルギーの事だ――いや、それはどうだろう？　体力自体そもそも……いや此処は置いておこう――それが精神的エネルギーに変換？　なんだそれ。それがそもそもおかしいと言うのだ。精神的エネルギーって何だ？　人の意思のエネルギー？　人の意思が動力になる？　何それ。そんなのある訳が無い。体力を精神力に変え、それを物質化する？　何で変換された精神エネルギーが人の意志によって影響を受けるの？　体力が人の意志に影響されるとでも？　何故変換されたら何故そうなる？　体力が変換されてそこから人の意志によって影響を受けるエネルギー？　しかもイメージによって練る事で物質化？　それがおかしい。そもそもこの魔力と言う存在自体おかしい。文献によれば魔力とは、精神に近いエネルギーとの事。精神に近いのにエネルギー？　そもそも非物質的エネルギーだと？

それを操る技術が『魔法』？　物質でさえないものが何でエネルギーになるんだ？　しかも何のエネルギーに？　魔法？　じゃあその魔法ってそもそも何？　魔力と呼ばれるエネルギーを扱った技術？　魔力って？　魔法力と呼ばれる精神機関によって生み出された精神的エネルギー？　魔法力って？　心に存在する精神機関で、持ち主の意思に応じて体力を取り込み魔力と呼ばれる精神エネルギーを作る？　んじゃ精神機関って何よ？　心等に値する人間の持つ精神的な機構全般？　じゃあ心でいいじゃない。何で態々そんな機械みたいに説明する必要があるの？　そこがおかしいと言うのだ。訳の分からない現象を無理に説明しようとするから訳の分からない事になる。だから全面的に――――――――――

「――瑞穂さん、瑞穂さん！」

ピクリ、と私は急に思考の海から引き上げられ、現実の世界にシフトする。脳内時計を確認し、経過時間を――総計三十四分経過――うわ、結構考え込んでたみたいだ。吃驚。

「瑞穂さん？　聞いてますか？」

「はい」

私はいい加減に反応する事にした。同時に私は聞かれるであろう

返答を瞬時に予測し、ついでに今まで聞いていた授業内容の全てを記憶から引っ張り出す。尤もさっき聞いたばかりの記憶したての新しい記憶だ。特に問題は無い。
「では瑞穂さん、今まで何を話していたのか言って見なさい」
「……何処までですか？」
そう返すと先生の眉がピクリと動くのが見えた。どうやら今の台詞が堪忍袋の尾にダメージを与えたらしい。おかしいな、私的に重要かつ当たり前の事を聞いたのに。
「最初から全部です！」
「分かりました」
最初から、全部と。了解。私は早速引き出したデータバンクからこの授業開始時点の台詞を引っ張り出し、それを席に座った状態で音読する。
「起立、礼。お願いします」
「瑞穂さん、貴方先生を馬鹿にして」
「今日は前回の続きから始めます。全員氷属性魔法の教科書四十五ページを開いてください。では前回勉強した所を、桜庭さんはい、前回は氷魔法を有効に発動する場所について勉強をしました。よろしいでは前回の復習としてどういう場所が良いのか、何故そこが良いのかを阿部さんはい、氷属性の魔法は気温が低い所だと氷の発生、そしてその維持に必要魔力が軽量化するからです、よろしいでは今日はその次、氷属性魔法の苦手な場所について勉強していきます氷属性魔法が苦手な場所とはええ近藤さんはい、氷属性魔法が苦手な場所を述べてくださいはい氷属性魔法が苦手な場所は基本的に気温が高い場所ですその理由は気温が高いと氷魔法の発生とその維持に余計な魔力が掛かるからですその通りですよく出来ました先生その理論おかしいです何がおかしいというのかしら燃焼さんだって氷って基本水が冷えた固まったもんだろ？　じゃあ水分が多い湿気のある所も氷魔法が得意とする所なんじゃないか？　例えば熱帯とかさ確かに言えてますが乾燥している砂漠などは氷魔法は魔力の消耗が

激しくなりますがそうですねえでも気温が高いところ全部が駄目って訳でもないでしょう？　ふむ燃焼さんはその喧嘩腰の態度さえ改めれば鋭い指摘と言えますね確かにその通りですでは次のページへん？　瑞穂さんどうしましたか？　瑞穂さん？　瑞穂さん！」

私は再生を終える。この間にも色々作業や口調の関係で色々時間差があったようだが全てカットし五分で語り終える。取り合えず言われた事を言われたとおりに再現に成功した。しかし女教師の顔は驚愕に染まっている。何が起きたと言うのだろう？　ふむ、『私個人の常識』では驚くべきポイントが見つからない物の、『一般世間の常識』で考えると如何考えても異常ではある。恐らく驚いているのはそこであろう。教師は引き攣った唇を何とか戻そうとしながら授業に戻る。暇だ。

「で、でで、では、みず、みみ、瑞穂さん？」

「はい」

「教科書四十六ページを読んでください」

ふむ、教科書を開かなくても言えるのだがいう必要性はあるのか考え、無いと判断しそのまま喋る。後その震えた声は指摘するべきかな？

「氷属性魔法の得意とする属性と苦手とする相手について。氷属性魔法は基本的に液体が凍りついた物体を操る魔法であり炎属性の魔法とは相対属性にある魔法である。そして」

「其処まででで結構です」

む、全部読むものと思っていたのに。まあ良いや。残り授業の終了時間の確認――総計四十二分五十二秒――うわ、もう直ぐ授業も終わりか。さてと再び思考の海に浸かって授業の時間でも潰すかな――ふうむ、六番回路は非常に興味深いが深遠の如く思考の海に引き擦り込まれる。五番回路の元へと向かい――痛い。何故か痛覚が反応する。腕を動かして痛覚が反応した部分に手を置く――場所は後頭部。何か小さく硬い物が当たったと予想――私は視線を空から外し周囲を探る。誰かが物を投げたのは予測出来る。問題は誰が、

だ。と、そこで火憐――燃焼火憐。朱色で短い髪をした私のクラスメイト。中学二年からずっと同じクラスを貫いたギリギリ幼馴染――が頬杖をつき、やたらと脱力した様な機嫌の悪そうな表情でこっちを見ていた。何だと思っているとシャーペンを私の方に向け、そして下に向けさせつんつんと無言で指示するので疑問を感じながら下に目線を下げると、何か――白い、四角の塊だ――が落ちてた。拾ってみれば、何重にも重ねて織った紙の様だ。広げてみると一文、“取り合えず黒板見とけ。それだけでも色々言われないから”とだけ。

私は顔を上げて火憐の顔を見る。火憐は黒板に顔を向けている。頬杖も付いたまま。茫然としてたらどうやらキリの良い所で授業を終えるそうだ。起立の合図が聞こえる。私は席から立つ。

「有難うございました！」

次第に授業の終了を告げるかの音が鳴る。にしてもお腹減った。

（後書き）

ども、やーです。
今回はオリジナルでカオスを目指しました。
意味の分からない天才の思考回路を少しでも堪能していただけたらこれ幸い。
改行が少ないのは思考が早いから、と受け取ってください。
ではでは、質問と感想随時受け付けてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1802o/

天才少女の授業態度

2011年8月27日03時10分発行